

熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2021年7月21日



No. 49

イベント情報 (令和3年8月～令和3年10月)

企画展 会場：熊本県博物館ネットワークセンター 入場無料

第1回企画展 「円のあゆみ ～近代通貨制度の150年～」

明治時代から現代にかけて発行されたお金を展示し、その変遷を制度や社会の変化とあわせて紹介します。

○開催期間 令和3年6月8日(火)～8月9日(月)



第2回企画展 「教科書に登場する動物たち」

学校で使用されている教科書に登場する動物たちを、当センター所蔵の標本を用いて紹介します。

○開催期間 令和3年8月17日(火)～10月17日(日)



フクロウ



タガメ

フィールドミュージアムに飛びだそう!

県内のさまざまな場所で自然観察会を行います。熊本の豊かな自然に触れてみませんか。

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
夏の星空を楽しもう	熊本市南区 城南町 県民天文台	9月3日(金) 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡で、夏の星座や星の観察を行います。	8月9日～ 8月20日
植物体感ウォーク	宇城市豊野町	9月11日(土) 10:00～12:00	20名	植物のいろいろな特徴を体感します。	8月16日～ 8月27日
白亜紀の化石を探そう	上天草市 櫛島	9月19日(日) 13:30～15:30	20名	本物の地層と化石を専門家の解説で見学します。	8月23日～ 9月3日
水辺の生き物を観察しよう	菊池市七城町 鴨川河畔公園	9月25日(土) 13:00～15:00	20名	水中の生き物を観察します。	8月30日～ 9月10日
月の観察と写真撮影をしよう	熊本市南区 城南町 県民天文台	10月15日(金) 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡で月の観察をしたり、写真を撮影したりします。	9月20日～ 10月1日

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：参加希望プログラム名、参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、往復はがきまたはメールで、博物館ネットワークセンターへお申込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。
(往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。)

記載されている行事は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況や災害等により、日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。

No. 254
歴史

こくりつぎんこうしへい
国立銀行紙幣旧1円券（西崎俊秋寄贈資料）

本資料は、明治政府が金本位制度のため、兌換紙幣（本位貨幣と交換が保証されている紙幣）を発行する必要があったことから、民間の国立銀行によって発行された横長型紙幣です。この紙幣は、明治5年（1872）に国立銀行条例を制定したことがきっかけとなり、アメリカの企業であるコンチネンタル・バンクノート・カンパニーが製造し、翌6年（1873）から1円・2円・5円・10円・20円の全5紙幣が発行されました。

この紙幣には、兌換文言・公債証券引当文言・法貨表示文言・偽造罰則文言が券面に印刷され、表面には、源為朝みなもとのためとも又は上毛かみつけ野田道ののたみちと考えられている人物と兵船の図案、裏面は、元寇げんこうの様子を描いた図案があります。他にも「武蔵 東京 第十五国立銀行」や「頭取 毛利元徳もうりもとのり」とあることから、明治10年（1877）に開業した第15国立銀行（現在の三井住友銀行）が発行した紙幣ということがわかります。

国立銀行は、第153銀行までが各都道府県に散在し、熊本県内では、「第9銀行」（熊本市）、「第135銀行」（宇土市）、「第151銀行」（熊本市）が開業し、その中の第135銀行は現在の肥後銀行の前身となります。

現在の銀行につながる国立銀行が発行した本資料は、令和3年度に開催される企画展示「円のあゆみ～近代通貨制度の150年～」に出品していますので、ぜひ実物をご覧ください。（堤 将太）



図1 国立銀行紙幣旧1円券（表面）



図2 国立銀行紙幣旧1円券（裏面）

No. 255
地学

シノブ石（忍石）

今回紹介する2つの岩石には、シダの葉のような模様があります。これらはシダの葉の化石でしょうか？

2つの岩石は、リソイダイトという、マグマが冷えて固まった岩石が熱水で変質したものです。そのため、化石を含むことはありません。これらの模様は化石ではなく、岩石の割れ目に水がしみ込み、その水に含まれるマンガンや鉄の酸化物が沈着してできたものです。図1はマンガンの酸化物、図2は鉄の酸化物が沈着してできました。このような石は、模様がシノブというシダの仲間に似ていることから、「シノブ石」と呼ばれます。

一見すると化石のようなのに化石ではない石を、偽化石ぎかせきといいます。偽化石ぎかせきは、生物とは無関係なのに、形や構造がある種の生物に似ているため、化石と間違われます。シノブ石は偽化石ぎかせきを代表する石です。

これらは、天草郡苓北町都呂々および富岡半島で採取しました。リソイダイトは天草陶石とうせきや天草砥石といしの材料となる岩石です。天草下島では苓北町から天草市天草町にかけてリソイダイト岩脈がんみやくが分布しています。海岸で白っぽい石ころをよく見てみると、シノブ石が見つかるかもしれません。（廣田 志乃）



図1 シノブ石（マンガンの酸化物）



図2 シノブ石（鉄の酸化物）

No. 256
民俗

せおいはしご
背負梯子

木杵に荷物をくくりつけ、背負って運ぶ道具です。荷をのせる横木(爪)のある有爪型と、爪を持たない無爪型に大きく分類されます。無爪型は東日本に多く、熊本県ではほとんど見られません。有爪型には股のある自然木を利用したものもありますが、多くは写真の資料のように材を組んで作られました。また、背に当たる部分に縄を巻いたり、わらの背当てをつけたりすることが多いようです。

背負梯子は木製のため丈夫で、荷物が固定されて運びやすいことから、山間部の狭い山道で、椎茸の原木、薪、木炭など、重くてかさばる荷物を運ぶのに適していました。県内での分布はやはり平野部に少なく山間部に集中しています。

ところで、背負梯子という呼び名は関東地方で使われるもので、県内では背負うことを「おう」あるいは「からう」ということから、オイコ、カライなどと呼ばれていました。ちょっと変わった呼び名に、天草地方のウエ、チゲ、緑川上流域のトウジンカライというのがあります。ウエについてはよく分かっていませんが、長崎県の五島列島や平戸あたりでもこう呼ばれるようです。チゲは韓国の背負梯子の呼び名で、天草のものと同様に形態が似ています。中国にも似たような道具があることから、これらの地域には大陸から伝わったものが広まったと考えられます。(迫田 久美子)



現地呼称：オイコ
使用地：南小国町

No. 257
動物

ミゾゴイ *Gorsachius goisagi* (サギ科)



図1 ミゾゴイ幼鳥標本(山都町産)

本種は「環境省レッドリスト2020」では絶滅危惧II類、「レッドデータブックくまもと2019」では絶滅危惧IB類とされていますが、後者の解説からは個体数の変動についても把握が難しいことが読み取れます。

図1の標本は、1990年7月22日に上益城郡清和村(現・山都町)で拾得されたものです。翼や頭部に細かい白黒の虫食い斑が目立ち、くちばしや脚の黄色みが強いことから、幼鳥であることが分かります。

拾得に至るまでの経緯は不明であるものの、時期的に県内で生まれた個体である可能性が高く、繁殖を窺わせる貴重な資料と言えます。(中菌 洋行)

ミゾゴイ(図1・2)は全身が赤茶色の羽毛で覆われた、ほぼ日本のみで繁殖している、世界的に希少なサギの一種です。熊本県では夏鳥として、毎年少数が東南アジア方面から飛来し、ごくわずかな繁殖記録が知られています。湿潤な森林に生息し、ミミズ類やサワガニ、昆虫などを捕食しているようですが、元々個体数が少ない上に人目に触れにくい環境であるため、まだ生態に不明な点が多いようです。



図2 ミゾゴイ成鳥生態写真(八代市泉町)

No. 258
植物

ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* (ウルシ科)



図1 ハゼノキ
a: 並木 (熊本市北区龍田) b: 雄花 (宇城市松橋町)

ハゼノキ (図1) は、その果実に多量の蠟^{ろう}を含み、人々の生活に利用されてきました。かつて熊本藩が栽培を奨励^{ろう}し、蠟^{ろう}の特産品として藩外に輸出していたことはよく知られています。

また、ハゼノキはかぶれ (接触性皮膚炎) をおこす植物としても知られています。ハゼノキだけでなく、同じウルシ属のツタウルシ、ヤマハゼ、ヤマウルシ、ウルシなどでも、さわったり、樹液

がついたりすると皮膚炎になります。敏感な人は木の下を通っただけで反応することもあります。これらの樹木の樹液に含まれるウルシオールという物質が、皮膚への刺激性をもち、皮膚炎の原因となっているためです。上記のウルシ属植物の中でウルシ以外は熊本県内に自生しています。野外活動の際には、さわらない、近づかないなど注意が必要です。また、ウルシオールは、分子同士が重^{じゅうごう}合して固まるという性質があります。この性質を利用して、ウルシの樹液を塗料として塗布した道具類が漆器です。

ハゼノキの遺伝的多様性の分析などから、本州・四国・九州のハゼノキには、古くから自生していたものと、江戸時代に琉球列島や中国大陸から持ち込まれたものの両方があると推論されています。であるとすると、熊本県内にも植栽されたハゼノキと自生のハゼノキの両方が生育しているのかもしれませんが。図2の標本は、1931年に熊本市の江津で採集されたものです。ラベルに cult. (cultivated: 栽培された、の略) とあることから植栽されていた木であることがわかります。図3の標本は1986年に熊本市の神園山で採集されています。ラベルには「山麓」の表記があり、自生のハゼノキである可能性があります。しかし、熊本県内



図2 ハゼノキの標本
(1931年熊本市江津, 栽培)



図3 ハゼノキの標本
(1986年熊本市神園山)

で植栽由来と自生のハゼノキがどのように分布しているのか、これらがどのように関わり合って生育しているか、などははっきりしていません。多くの標本とその情報を蓄積することが、ハゼノキの秘密を解き明かすヒントになるかもしれません。身近な植物であっても、時代や場所を変えて標本を作り、保管し、蓄積することは、自然の姿を探求する自然科学において大きな意義があります。(前田 哲弥)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302

E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km

